釣れない時

君は何を考へるか

佐藤惣之助

青空文庫

フイロソフイストは、「人は考へる為めに生れて来た」といふが、われわれフアンテエジストは、「人は空想する為めに生れて来た」と云つてもよい程、用もない時は空想ばかり馳らせてゐる。殊に一個の文章を書かうとする前、一つの考案を纏める前、さういふ時には、この空想の加速度によつて、多くその文章が破棄されることすらある。従つてその空想の奔馬は自在に荒れ狂つて、遂には果てしもない無有郷へ行くか現実をどうどうめぐりして、そのまま没落してしまふ。

釣りに行つて、イザ釣らうとする時、又竿をのべてアタリを待つ時、潮の調子の悪い時、月の明るい時、遥かな港や村をふりかへる時、同じやうに空想の奔馬は天を馳り地を潜る。そしてよく現実がお留守になつて、太公望的期待の心境に陥るか、又はロビンソー・クルーソー式の感情に偏することがある。（釣りに行つては決して現実的の事は断片的にしか考へられない。又考へてゐたら決して釣れないのがふしぎである。）例へば、

＊

岩魚、ヤマメ、鮎に行つた場合に就いて。鳥、魚、昆虫にも、各自の生層を通じて、自在に会話の出来る瞬間といふものが、有るのではないか。

樹木は「善」の象徴である。曰く彼は何んにもしないから。

海が渓流を引くのか、水が海と山を結ぶのか、水とは白い冷い火ではないのか、或は最もよき食物であり、流れるパンではないか、ターレスは智者だつた。水を愛する者は感情家だといふことだ。

この山には、日本のジプシー、山窩はゐなかつたか、彼等は鮎を何で釣るか。

神農民は、あらゆる草木を舐めて後、何故鮎をムシヤとやらなかつたか。

ギリシヤの神々は釣りをした。日本の神々も釣りをされたに違ひない。釣りをしない民族は不幸だつた。

パミール高原やアマゾンの奥で、一度は釣つて見たいものだ。雲南や青海省の方面の釣信を聴きたいものだ。

もし自分がこのまま帰らなかつたら滑稽だ。心臓がパタリと止まつて。

山姥といふものは猿も同然だ。

蟒、熊、狼、などといふものは、想像するほど人に危害を加へるものではない。うまく行くとよく馴れる。

仙人になるといふことも、ある一歩のところまでは本当に出来る。

生食、裸形生活、雨露の問題、それを練習するには三年かかる。

それ以前に誰しもが斃れるからつまらん。

山を下りて行つたら、世の中が一日で変化してゐたり、山峡づたひにペルシヤに出たり、深い無限の竪穴があつたり、桃花郷があつたり、ナポレオンと釈迦と、ガンヂーとヒツトラーなどが向ふから歩いて来たり。

女児を生後一ヶ月から渓流で教育したら、一人を唖にし、一人を聾にし、一人を裸にし、一人を鉄仮面にし……。

一日一人で笑つてゐたら発狂するだらう。

そんな空想をのんきに駛らせて釣り歩るく。然し川釣りになると、町や村も近いし、夜は灯が多いし、あたりに必ず人間もゐるから、馬鹿馬鹿しい空想も起らない。然し夜陰に一人で小舟で釣つたり、蘆の中に隠れてゐたりすると、古い昔の事やら季節的なものがよく眼について、大変におもしろい。然し本当に空想が雲のやうに湧くのは海だ。それも船頭や他の仲間がゐたのでは面白くない。防波堤で徹夜したり、岩礁で一人釣つたり、島蔭で釣る時は、時に空想自在である。例へば、

なる程海は動いてゐる。何万年も動いてゐる。万物は海から這ひ上つて来たに違ひない、植物も動物も——そして人間、火は上昇した、水は沈んだ。水と火、万物の母。

海藻から、覇王樹から、柳から、蘆から、植物は這ひ上つて来た。

プラングトンから、水母から、貝殻から、甲足類から、彼等は人間を目的にしないでやつて来た。

人間——それは最も海にとつて必要のない化物だ。

気層に羽のあるもの、地層に足のある者、水層に鰭のある者。世界は三段になつて出来てゐる。

鼻糞の白い日は、人間も貝殻の生活だ。

海と女——或は女の方がよく海を知つてゐるかも知れない、潮時の出産、月のもの……。

女の半面の片側のもの、魚。

魚は恋を知らない、痛疼感がない、然し彼は驚く、彼は怒る。

上層を遊弋する奴も、下層にへばりついてゐる奴も低脳だ。インテリ性の魚は中層を往く。

魚は波浪の音以外の音を嫌ふ。

上層が銀、中層は紫、最深層は紅、紅の魚は深い。

魚は近眼か、老眼か、どうも組織が反対ではないのか。

海は恋を嫌ふ。陸の灯は遥かに遠い。

海には甘水がない、こいつは不思議だ。

暴風(しけ)はやむを得ないが、食料がなければ船は死刑台だ。

人間は貝殻のつもりなら生きられる。然し魚の真似は出来ない。

海から見た海、円い海、円い空、水平の一線。中の風、浮くもの、あとは何んにも見えず。

一個の人間、一個の蟹、浪にとつては同じこと。

鴎は空に、魚は潮に、人間は中ぶらりん。

日本は海から見た時のみ蒼古(そうこ)としてゐる。

地震、浪は囁(ささや)くだけだ。

海は明るい、真の闇といふものは海底にしか存在しない。

魚は発光器を持つから発声器を持たない。

魚は泣かない代りに、魚は笑ふ。

海は階級だの、貨幣だのに関係のない時にのみ面白い。

海では魚よりも釣餌に苦労する。

魚のホテル、釣りのかかり、釣徒の難所。

このまま自分が帰らなかつたら悲惨だ。陸上の家族が。然し自分が海津に腐肉を啄かれるのは痛快だ。

海と死、紙一重。

海は聾である。盲目である。彼は漂流者の五官を奪ふ。

白帆——希望、島——休息、船——足であり翼である。

世界には血よりも塩が多い。

風、取去ることの出来ない世界の呼吸だ。潮の世界の血液だ——青い。

羽は欲しくないが鰭は欲しい。呼吸機関と鰭の推進器はつながらない限りはない。

紙のモーター・ボート、海の蝶々。

海水浴者は海を怖がる。釣徒は海を可愛がる。

定まつて釣れない時には、そんな事を考へて、海といふよりも、大きい明るい自然に対して、ぼんやりと驚歎してゐる。さうしてゐる時は無論虚無的になつてゐるが、然し何か大きいものに抱かれてゐるやうで、生きてゐることがいとしく、又有難いとも思ふ。そんな意味で、われわれフアンテエジストのためには、釣りが何よりの自由権であり、夢想郷への形影問答でもある。

（七年・十・十五）

青空文庫情報

底本：「集成　日本の釣り文学　第二巻　夢に釣る」作品社
　　1995（平成7）年8月10日第1刷発行
底本の親本：「釣心魚心」第一書房
　　1934（昭和9）年4月発行
※ルビを新仮名遣いとする扱いは、底本通りにしました。
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：門田裕志
校正：岩澤秀紀
2012年7月1日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

釣れない時

君は何を考へるか

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　佐藤惣之助
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/